

Title	高村象平著 西洋経済史
Sub Title	
Author	宇尾野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.6 (1955. 6) ,p.483(61)- 485(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19550601-0061
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550601-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

する重大な要因となつたのであつた。コールネル教授によれば「その衰退は、確かに、由々しい出来事であつた」のである。しかしフランスの毛織業は、この危機の時代に、一様に衰退して行つたわけではない。危機による影響が集中的に現われたといわれる都市の場合についても、衰退がフランスの如何なる都市にも同時に起つたのではなかつた。また危機の持続する期間も都市により大いに相違した。例えばイーブルの場合、十三世紀末に依然として繁榮を續けていたが、十四世紀に入つて非常に衰退した。そしてイーブルが復活することが出来たのは、十五世紀に入つてからであつた。またアライスの場合、十四世紀初頭にはむしろ繁榮期であり、十四世紀中葉に若干の衰退を示しているに過ぎない。そして早くも十四世紀末には薄手の毛織物をドイツへ向け大量に輸出することが出来る程に回復していた。ヴァランシアンヌ、トゥールネン、ドゥエーについても、危機の時期・その持続の期間を一概なものとして断定することは出来ない。しかしコールネル教授の指摘によるまでもなく概して「十四世紀における大都市の活躍が十三世紀より劣つていたことは疑いない」のである。

しかし衰退期といわれたこの時期においても、農村の諸中心では、依然として毛織業が繁榮を續けていたのであつた。ポリアリンガやデイクスミューダの繁榮はいまでもない。またランガマルクやホンドシュエイトが「輝かしい経歴」を開始したのは、正にこの時期であつたのである。農村の諸中心における繁榮に對し都市の諸中心は悪感情を持つた。ガンは十三世紀末にその反感を露骨に示し、またブルージュ、イーブル、セントメーブルが附近の農村に對して抱いていた反感には、全く根強いものがあつたのである。このような動きが、農村の新種の織物を採用しようとした同じ都市の内部に、對抗的に顯著になつ

たことは、コールネル教授によれば、農村における毛織物業の意外な進展を示す證據にほかならない。「農村の各所で幸いにして毛織業が起つた」。農村の諸中心のうち、例えばランガマルクの場合、一三八五年に絶頂に達し、引續き高い生産水準を維持していた。ウエルウィックは、農村の毛織中心として、一四〇〇年まで重要性を續けていることが出来た。コルトレイクは一四二二年まで繁榮を續けている。またホンドシュエイトは「十四世紀の初頭以來イタリで成功し、十四世紀末まで上昇を續けた」。従つて、「一般に概して不況と見られた時期においても、若干の織物中心は繁榮を續け、國際市場で、成功は顯著であつた」のである。實にこれは、コールネル教授によれば、農村の諸中心に負つたのであり、十四世紀を危機の時代といわなければならないとしたら、都市の毛織業に關する限りであつたのである。

四

十六世紀に入り、大都市の傳統的な毛織物業は衰退した。これに代つて、農村における毛織業の發展は目覺しく、都市の傳統的な毛織業に對する絶對的な優位を容易に達成することが出来た。十六世紀農村における毛織物業の發展は、コールネル教授によれば、「疑いのない事實であつた」のである。

特にアルマンティエール、ヌーヴ・エグリス、ホンドシュエイトの發展が目覺しかつた。アルマンティエールは一五四〇年に發展の頂點に達し、ヌーヴ・エグリスは一五四八年に最盛期を迎えることが出来た。しかしこの兩中心とも以後急速に衰退し、例えば一五七一年にアルマンティエールでは、織物業者三百人を数えたに過ぎず、従つて最盛期の約半數であつた。これに對してホンドシュエイトは一五六八年まで發展を續け、そしてこの

年には薄手の毛織物三千反を生産することが出来た。しかしこの繁榮も、政情の不安によつて間もなく阻止されなければならなかつた。同じく繁榮期を迎えることが出来たといつても、コールネル教授の指摘によるまでもなく、「農村の毛織物業は非常に異なつた様相を呈している」のであつた。

農村における毛織業の繁榮を見て、都市の毛織工業は極力これを見習おうとした。そしてこの傾向が以前より増してこの時期に顯著になつたとコールネル教授はいうのである。教授は若干の都市について、新技術移植の苦心を述べている。例えばブルージュの場合、その努力は報いられ、遠く十八世紀まで薄手の毛織物をアメリカへ向け輸出することが出来た。イーブルも薄手の毛織物の生産を維持していた。ワレーンの諸都市は技術改良に成功することが出来た。またアライスは十六世紀にホンドシュエイト産以上のものを生産することが出来た。そして間もなく、フランス地方から輸出される織物の主要な部分を産出するようになったのである。トゥールネンやヴァランシアンヌ産の織物が、十六世紀フランスの輸出貿易において果していた役割も無視し難い。リールに關しては、十五世紀を経て、十六世紀にはフランス第一の織物中心となることが出来た。とにかく、農村織業の影響で、都市の織物業は急速な繁榮に向つたのである。そして、コールネル教授によれば、「十六世紀の輸出毛織業は農村工業より都市工業である」と斷言しても差支えない程の繁榮であつた。しかし、都市における毛織業の發展が、農村毛織業の繁榮に刺戟されて起つたという限り、十六世紀についても農村毛織工業の主導性が強調されなければなら

以上がコールネル教授の論文の概要である。知られる如く、教授は、フランスの毛織工業の年代記的考察をもつて終始している。中世における大規模經營の典型と目され、從來取上げられることの多かつたフランスの毛織物業の研究にあつた。コールネル教授が今更の如くかかる態度をもつて臨んだことは、巨匠ビレンヌ以来の基本線に對し根柢から反論を試みようとしたともいふべきで、かなり積極的な意圖を持つものとしなければならぬ。またフランスの經濟發展について常に農村毛織業の主導性を強調し、都市工業の發展も所詮農村における繁榮に刺戟されて惹き起されたとした點、特に興味深いものがある。(渡邊國廣)

高村象平著『西洋經濟史』

西洋經濟史の手頃な著書の必要については年來要望されて來た處であるが、今此處に著者の長年の成果に接し得たことは日本における西洋經濟史學界の喜びである。ともすれば無味乾燥になりがちな斯學に色彩を與え、變轉する歴史を生きたものとして捕捉することのむづかしさは本書において美事に超克され、且つ學習者の研究關心を知らず知らずによび起す配慮が全編に温かくにじみ出ており、著者の物靜かな風格を彷彿たらしめるものがある。然し乍ら峻烈な芯の強さが一貫して流れていることもまた序文のなかでまづ觀取される。

著者は西歐文化の起源を古典古代に求め、第一章「ギリシアローマ」から筆を起す。古典古代の難解な歴史事象がここでは何んのだよみもなく流麗な章句によつて綴られてゆくが、しかし、ここで著者のベースを自分のものとして學びとるためには讀者は可成りの習練を必要としよう。その際ヘレニズムの文明を如何に位置付けるかは評者にとつての關心事であつたが、こ

五

の節はできれば獨立の章にして頂きたかつた。

同章第二節「ローマ」については充實した説明がなされてい
る。然し乍ら古典古代の下限について通説に反して、東ローマ
にまで言及されたことは、グレゴリウスに關する著者の識見に
よるものと解するが可成り異論の存する處とならう。若しそう
であるならば、第二章以後の鈞合第一章は少くとも四つの節
が望まれないだらうか？

第二章「中世」は著者の文化理念若しくはライテンデ・イデ
ーを最も明確に表明されたものとみてよいのではなからうか？
ここで著者はローマ・ゲルマン文化の連続性よりは、むしろゲル
マン・ネンを中心とする西ヨーロッパの新たな世界を志向され
る。著者の多年に亘るゲルマン文化の研鑽の深さはこの章のい
たる處で躍動しており、非凡な本質的理解が屢々散見される。
ただ同章第二節「莊園制度と農業」はその細節として「一、封
建制度」となっており、グランド・ヘルシャフトが問題となつて
いる以上莊園ウィラ若しくは莊園ウィリカチオ制度よりはむ
しろ領主制度とされた方がその主旨によりよく適合するのでは
あるまいか？ 従来の古典的學說を眞向から排除する必要は毫
も存しないが、ウィリカチオに基盤を置き乍らも實際に言及さ
れているのはむしろ領主支配の全面的な理解がここで問題とな
つてゐるからである。

「グランド・ヘルシャフトは土地の支配だけのものではない。
土地の支配が、土地所有とは無關係な種々の支配即ち經濟外交
配を含むのである。即ち領主的支配とも言うべきものであつて
大小の貴族は、その所有地乃至保有地とそれに束縛された農民
とを、經濟的・經濟外的に支配した。これが西ヨーロッパの諸
國の封建制に共通の基礎であつた。」(同九三―九四頁)との領
主制説をとられる以上、すでにここでは領主裁判權、ツウイン

グ・ウント・パンをも含む廣汎な封建的支配體制が問題となつ
ている。勿論ここではいわゆる經濟外強制一般ではなくグレン
ド・ヘルシャフト(領主支配)の内容としての領主權(ヘルリッ
ヒ・レヒト)が問題となつてゐる。つまりここでは領主權は領
主のシュツツ・ウント・シャルム(庇護)に相對するもので近
代的な權利義務のそれではない。封建社會といつた近代的社會
概念を用いることの當否は別として、この時代の一つの大きな
モメントとしてのフェーデーについて多少懇切な紹介が望まし
い。いうまでもなくこの本は經濟史のテグストなので法制史的
にハンムラビ法典、マヌ法典もしくはホメロス、ヘシオドスの世
界にまで法源をたどる必要はないと思われが、少くともフェ
ーデーがドイツ中世に占める意義はこの章で頻繁に要請される處
だからである。とくにドイツ農民戦争とフェーデーの關係は無視
しがたい問題であり、そのような基本的な問題への適確、簡潔
な紹介が望ましい。「經濟外的な」と言われる場合古代・中世に
おいてそのような諸條件の比重が極めて大きいことを示唆して
いたできたかつた。その意味でも古代から中世にかけての一貫
したライテンデ・イデーが要請される。勿論それはすべてを一
つのイデーの枠にはめこむが如きものではなく、著者の消化さ
れた識見からみちびき出されたならば、讀者にとつて幸いとな
らうからである。とは言え、本書で扱われている領域は必しも
ドイツにのみ限定されず廣汎且つ多様な西ヨーロッパの全域に
及んでおり、著者の眼はさばりに遠方にその焦點を合せている
のであることを忘れてはならない。經驗科學としての經濟史の
本質的事態を通じての著者の筆鋒がさえてくるのもこの邊から
であり、讀者をその波瀾にとむ描寫に誘ひこむ。

同章第五節「身分制社會」は全く適切なものと思わる。著者の
卓見における一つのピークを成しているこの節は、本書に新鮮

ないぶきをあたえ、著者の着實な研鑽のあとをしのばしめるも
のがある。ただ慾を言えばこの節の「三、身分制國家」で國家
が問題となる以上、國家形成——ランデスホーハイトの論據の
解説が望まれる。中世におけるシュテンデの存続はすでにカ
リング以来のことであるが封建制末期とみられるこの時代に身
分制乃至は等族國家への變貌が生じたとするならば、それまで
存在しなかつた何ものがあらわれるか、または單に封建國家
の變容か、あるいはここで始めて新たな國家概念が形成される
のかが讀者にとつての難問とならうからである。言うまでもな
く中世の部に扱われたこの國家は近代國家とは異つた性格をも
ち、しかも次の絶対主義國家への前提條件となることについて
著者は「フランス、スペイン、ドイツ大領國等における絶対王
政は、身分議會の無力化を地盤として成立したのである。」(同
一五八頁)とのべられる。

この意味でシュテンデシュタートあるいはフラッピエン・シ
ュタートは新たな研究の分野として明日への研究課題となるも
のであり、讀者はここで著者の言外の要求に一篇を喫するので
はあるまいか？ 著者の専門分野の旺盛な研究意欲がここでは
からずもその一角をみせはじめたように感ぜしめられる。

第三章「近世初頭」はまさしく政治と經濟の交錯した場面と
なるが、著者はさすがに精細な手法をもつて問題の糸口をたど
つてゆく。ここで「純粹な形態での資本主義の如きは現實には
何處にも一度たりとも存在しない」(同二七〇頁)といわれる論
據は勿論封建制度についても妥當するであらうが、しかしダイ
ナミックな西洋社會經濟史學それ自體必しも統一された見解と
してあらわれてこぬ以上、政治・經濟・政策の夫々の見解が生
かされるような方向で問題がとりあげられたならば、著者の日
頃の學說史的蘊蓄の一端に接することができたかも知れない。

書評及び紹介

とくにこの時期の特異な性格が問題を複雑にしているが絶対主
義、重商主義、マニユファクチュア、農制の分野でのこの時代
の先覺者の見解による問題の處理を紹介することは、著者にと
つてはむしろ容易であつたであらう。しかし乍ら、複雑な事態
をいよいよ難解なものとし、問題の行方さえ見失わしめるが如
きことを著者は巧みにさけてゐる。この點でも日本における國
民性を表わす學術論文のスタイルが西歐における學術論文の
スタイルと極めて對照的であることを示している。第四章「近世」
で著者の客觀的な敘述はそのこと自體が一つの著者の一貫した
態度として首肯されるが、しかし問題自體が何等かの意味で著
者自身の立場如何を迫まつてゐることもまた否定できない事實
である。

そこで再び序文に戻らう。ここで經濟史研究とは何か？ と
いう問が自然に發せられるであらう。そしてそれは人間の無限
の知識慾求を意識しながらも決して個々の信條によつてくみつ
くされぬ經濟史研究者が、その人間の成長と歴史の形成との相
關の間に生きてゐることが知られる。哲學者はたしかに自己を
解明し、且つ他者にも話しかける。しかし經濟史家は同時に歴
史的時代の冷靜な批判者でもあることを本書は要求する如くで
ある。

以上評者の所見のみをのべた。しかし本書のもつ意味は經濟
史學習者にとつて大きなものがある。各章末に掲げられた參
考文献は今日必しも手軽に入手し難いものもあるが、從來の繙
譯書とは異り日本の西洋史研究書をも收めてゐる點で日本にお
ける西洋經濟研究史の一つの略圖として極めて興味を感ぜしめ
られる。(有斐閣發行 價三八〇圓)(宇尾野 久)